
オーバーテクノロジー使いのネギもどき

ラグエス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーバーテクノロジー使いのネギもどき

【Nコード】

N0016Z

【作者名】

ラゲエス

【あらすじ】

いきなり死んだ者がネギ・スプリングフィールドに憑依。

ネギまの原作知識と世界観がまったく違う能力をどう駆使してこの世界に干渉するのか？

このSSは『全ての終焉より戻りし1000歳のネギ』を書く前に考えていたオリネギ(?)主人公のSSです。

IS>インフィニット・ストラトス<機神融合を持つ憑依者設定(機神融合等)も少し入ってます。

第1話 『覚醒』（前書き）

「全ての終焉より戻りし1000歳のネギ」前に考えていたSSです。

完全にご都合主義なので注意されたい、では。

第1話 『覚醒』

ここはどこだ？

体を起こし、壁にある鏡を見て固まった。

「なんじゃこりゃあ！」

気づけばネギになっていた。

なぜだ？ 俺はいつ漫画の世界へ入ったというんだ？
その時であつた。俺の目の前に紙が浮いていた。

「何だこれ？ 浮いてるのは凄いが、見てみるか」

紙を取り、書いてある内容を読んでみる。

『この手紙を見てるという事は無事にネギスプリングフィールドのようだな。

それはどうでもいい。

君はこの世界に転生した。君自身覚えていないのは当然だ。精神が死んでいたのだから

このままだと君はこの世界で死ぬ事になるだろう。

理由は簡単だ、君の他に転生者が一人いるからだ。

転生者は君と同じ死んで女神から特典をもらい、転生し、この世界に干渉している。

そいつはネギアンチ、どころか君を殺しに来るだろう。

そのため、君に能力を授けよう。向こうは好き勝手に能力を与えたが、私が勝手に決めさせてもらおうか。

能力、それはまず一つ、魔力だ。これを全制御できるようにしてお

こつ。魔法は自分で覚えたまえ」

つまり、暴走もくしゃみによる脱げも改善されるのか。

あれ？ これってヘルマンで、下手したらエヴァンジェリンで積みじゃね？

大丈夫なのかな。

『2つ目はこの世界ではありえない技術、能力を授けよう。これは全てPAPを見たまえ。

PAPとは君の世界のP Pの事だ。PAPで選んだモノによつてはPAPの出番は無くなるかもしれない。以上だ。ちなみに君は女神経由の転生者とまったく別存在という事を認識してもらおう。

君はあくまで憑依であり、憑依した事によりその体は3次元が同じだからだ。2次元である世界、それに記される全ての存在は君に抗えない』

俺の持っていた紙に火がつく。慌ててポイっと上に投げる。

紙は地面に付く前に燃え尽きた。

「抗えない？ 意味がわからないが、とにかくPAPを起動させればいいんだな」

この世界に存在するゲーム機かと思い、机の引き出しを漁ると、P

Pの形をしているゲーム機を見つけた。

でもちよつとP Pより大きいかな。

起動させてみる。起動のさせ方は同じだ、同じすぎる。

「さて能力はこれか。何で表示がバンプ違う……パンプレストだ」

PANBREST（の下は相変わらずメガネ？）って書かれてる。

ぜんぜん名前が違っんだが、気にしないほうがよさそうだな。
PAPを操作していく。能力の項目表示が出た、出たけど。

「めちゃくちゃ多いよ。ページ数が5000以上ある。これ頭の中に入るの?」

断念しそっだがこの世界は危険のため、全てのページを読み始める。

……3時間後。

あまりにも多すぎる能力の数で圧倒された俺は途中で投げた。
それでも400ページは読んだぞ。

読むたびに俺の体が熱くなったり何かのオーラが出てたりしてたけど気にしなかった。

PAPをスリープ状態にし、ポケットの中に入れた。
現状確認のためここから出る。

扉を開けると廊下だった。

あれ? ここって学校なのか?

扉の上に「保健室」と記されてるけど、どんな学校だよ。
あんな家みtainな環境の部屋があるのか?

「ネギ!」

「ん?」

こちらに向かってくる同年代のツインテールの子がこちらに来た。

「ネギ、目が覚めたの？」

「え、ああ」

「目が覚めたなら学園長室に行くわよ」

「何で？」

「卒業式に倒れたでしょうが、マギステルマギになるための巻物貰ってないでしょ？」

呆れた表情で溜息を吐く。

ああ、この子はネギの幼馴染のアーニヤなんだ。
1つ年上か。精神年齢は別だけど。

「なら取りに行くか」

「ええ」

中に入ると学園長から心配されるような事を言われたけど、丁重に対応した。

修行場の巻物も頂き、学園長室から出る。

アーニヤの他に大きな女性が増えて……この人がネカネさん、か。

「ネギの修行場ってどこなのかな？」

「また見てないよ。見てみるね」

巻物の紐を取り、サラサラッと開く。

「えーと、これは」

「日本で教師をすることって絶対無理じゃない！」

「ひどくない？ 僕は日本に行く事になるようだ。アーニヤはどうなの？」

「私はロンドンで占い屋よ」

「心配しないで。2人とも、僕がんばるから」

「ネギ、向こうに行っても手紙を送るのよ」

「うん。送るよ」

向こうから来なきゃ送る事はないと思う。

原作だって数回程度の場面しかなかったかと、細かい部分は薄れてきてるけど。

「ネカネさん、いいんですか!？」

「仕方ないと思うわ。ネギのマガステルマギになる近道になるでしょ?それに……」

ネカネさんはアーニヤを手招きし、耳元で何か呟く。

内容は聞こえないけど、それを聞いたアーニヤは頷く。

あ、こっちに戻ってきた。

「ネギ、がんばりなさい」

「内容は聞いておくから、ネギは明日の準備してね」

「わかった」

アーニヤとネカネさんに親指を立ててグッドラックした後、自分の部屋に戻る。

え? 何でわかるかって?

ネギの記憶がちょっとずつ戻ってきてるからだよ。

どうやら記憶だけは残っているらしいから俺の頭に入るまで時間がかかったと推測。

くウェールズ・ネギの部屋く

自分の部屋に戻った俺はPAPを起動させる。

PAPには俺しか認識しない亜空間が存在するらしい。

白眉鷺羽のアレの改良版でその中にシステムが多く存在する。

「SRXやグランゾン等見つけたんだけど使う機会、あるのか？」

疑問を抱きつつPAPのデータを全て見ることにした。

……気づけば朝になってたりする。

鳥の声が聞こえた。窓からは太陽の光でまぶしかった。

「マジか。しかし困ったぞ。魔法のステータスが泣けてくる。原作より少ない」

魔法の射手、雷の矢と風の魔法の武装解除しかできない。

杖に跨って飛ぶ事できないんだぜ！

どうすんだよ！

……まあいい。今は荷物をまとめよう。

持ち物はナギの杖、服、下着、靴下、ズボンぐらいだな。

日常品は向こうで買おうか。どうせあの部屋になるんだろうから。

リュックの中に入れられるだけ入れた。

「さて準備はできた。後はネカネさんに」

俺はリュックを背負い、杖を背中に装備する。

この部屋の周りを見て、一回しか出てこない用品を見て苦笑いする。

「もう見る事は無いと思うけど、いつてきます」

所詮、憑依なんだろうけど、うん。

俺になるまでのネギの思いを込めて呟き、この部屋から出て行った。

家を出るとネカネさんが待っていた。

「ネギ、これ」

「ありがとう。ネカネお姉ちゃん」

ネカネさんから貰った空港のチケットとお金と手紙と目的地までを記した紙を見る。

乗換えが面倒だな。

空港から麻帆良学園までの距離が遠いんだけど大丈夫なのか？

まあ、間に合うのは1巻でもそうだったから間に合うだろう。

「がんばってね」

「そういえばアーニヤは？」

「アーニヤは昨日の夕方にロンドンに向かったわよ」

「そうなんだ。僕も行くよ」

「いつてらっしゃい」

「うん」

ウェールズの空気はおいしい。

きっと日本の空気は同じなんだろうな。

変な事を思いながら笑顔で見送ってくれたネカネさんに手を振り、空港へ向かう。

日本行きの飛行機に乗り、ウェールズから出港した。

飛行機の中でPAPを起動する。通信機能を停止してから残りの項

目を見る。

日本に到着後、乗り換えを繰り返し、ようやく麻帆良学園に到着した。

この学園の生徒達が駅から走っていった。

あまりの人数に呆気にとられた俺は我に戻り、PAPに記された能力を使用する事にした。

「能力『ゴッドガンダム』」

一瞬だけ金色のオーラが俺に包み込んだ。

その瞬間、周りが遅く動いているように感じてわくわくと気分が跳ね上がる。

ようし、思いっきりだと大変だからゆっくり行くか。

「いくぞ！」

初めのときのネギと同じ速度で麻帆良学園中等部の方へ向かった。

第2話『麻帆良学園、出席ナンバー32?』へ

第1話 『覚醒』（後書き）

このSS主人公は初期、基本魔法しか使えません。使うかどうかも不明ですが、能力が反則すぎるほどの内容になっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0016z/>

オーバーテクノロジー使いのネギもどき

2011年11月30日11時54分発行